

出かけるまえに踊りたい

群

青

出かけるまえに踊ろう

ぼくの
きみたちの
踊りを踊ろう
時の流れのはてまで
緩く両手を伸ばし
手のひらは開き
お別れと出会いの
足は軽く飛んで
前や後ろに
やがて

やさしくそろえ
口をわずかに開けて
言葉はださない
祈りでも
悔いでも
へだたりでもなく
きみたちの歌声にすべてを委ね
出かけるまえに
踊ろう

喜びは

砲弾と
しきりに落ちる色づいた葉
羊歯や苔の小道をのぼる
あちこちからひとの声が聞こえる
ちよつと開けた
あつたかい
ここでもいい
食べよう
産もう

戦争中でもできること

働く人 店 整地している現場
マスク

目の前のバスの友人たちの
皮膚 首筋 襟元 言語

周りに数メートル幅の
崩れた岩と砂ばかりの空地の
その真ん中で寝起きして
戦争のことを考えている

ちぎれ雲に朝日があたって
東に流れている
力が抜けてしまっている人声と
ピアノの細かい音

周りにいた男たちがつぎつぎに死んでいったという
女が近づいてくる

悲しみとねむけにさそわれる
たのむ

今のうちに
どこからでも食ってくれ
ぼくを

ぼく地方

食べてもらいたいものの用意がまだできていない
長い年月かけて
国や資本からもぎとつた「ぼく地方」で育つた
肉と言葉
皮膚にくるんで差し出したいのだが
味が
よくない
一口で下痢になる
埃のように吹き飛ぶ
まだだ

欲望

その姿勢や体つきや動きを見れば
どんな穴倉から出てきて

何を探し
どこに行こうとしているか
よくわかる

若いきみたちの目が
資本主義にしたがっている
ぼくの欲望を
見ている
老いるとそれも薄まった
だろうという
とおとぎ話をつくつても
ねときみたち

のんびりとしている緊迫
ころんと地球が手のひらで
転がる

ところで
いつか
ぼくを食つてくれ
きみたち

食つてくれ

冷え込みのない灰色につつまれた

黄色と緑と暗い赤の木々

一年中実をつけている木

音もなく雨がふっていた

気づく

砲弾の野に立っていた

静かな食事をした

静かに酒をのんだ

おんがくを聴き本も開いた

娘たちが会いに来てくれた

おねがいだ

いまだから

ぼくに食欲を感じてほしい

そそる詩を書いているんだから

ぼくを

食つて生きてくれ

潮

賑わいは終わったのだ
今に地球上の波がここにやってくる

手のひらにのせた地球を

風船のようにつくと

ゆつくりと抱きとつてくれるなんて

そんな終末はもうない

時が荒れている

世界の大陸からしみだしてくる

音もたてない

潮が

東シナ海を

たつぷりと

やっつけてくる

海峡を抜け

満珠干珠を浸し

門司も下関も黙る

見え隠れしているのは

父や祖父や知り合いの男たち女たち
大陸から毎日流されてくる
押し返しても押し戻され
水かさを増して押し寄せる
身をすくめる列島
波にのまれる
逃げられない
血の色
海の沈黙
泣いても
悲しみの叫びはしずまらぬ
日増しに色濃く
北に行きつき
さえぎるものもない空に
海は
赤く赤く
どす黒く黒く
海を泳ぐ屍たちは
みんなの知り合いだ
だれも弔えなかつた
知り合いだ

ときどき母がやってきてはなすんだという

1

ものみな土に埋もれ
水底に沈み
いくさの旗は
ちぎれてもたなびき

ずっとよ

わたしたちは

つとめ

倒れ

またつとめ

つぎつぎに

幼いあなたたちを

取られ

とどまらない

いくさ

とどまらない

おびえ

でも

つとめ

娘たちは
産む

続いているよ
途切れなく
いくさも
いのちも

途切れない
わたしたち
こわさない
こやしている
この星のかぎり
死んでいったわたしたちが
こやしている

男の母が時々やつてきてこんなことをはなすという

ときどき母がやつてきてはなすんだという 2

どうしても揺るがないのよね

体の芯にあつて
年老いた木みたいだけど
揺るがないのよね
金属でも石でもない
背が伸びたり縮んだり
太くなったり細くなったり
乳を吸う子みたい
弾力があつてあつたかくて

気が付いたのはあなたがおなかにいたころ
忙しい毎日になつてた
出征した父さんからの便りがなくなつてしまひ
食べるものも手にはいらなくなつて
夕飯を炊こうとしてたの
ぱらぱらのお米
水を多めにしなくちゃつて
蛇口に手をのばしたとき
深い深い井戸を覗き込むあたしが見えたの
心配や怯えのもつともつと奥を見ていたの

そのときは湧き水のようにだつた
悲しみが
それまで気づかなかつた悲しみが

湧き出ていた

わたしは湧き水を飲んだ
掌に汲んで

悲しみつつ強い
いのちの持つちからみたい
悲しみに打ちひしがれるってことはない
打ちひしがれるような悲しみはないの

生きてるってね

悲しみ

苦難っていつてもはじまらない

生きてるって

悲しみなの

でもね

それから続く日々は

静かなひかりを身に浴びて

歩いた

殺し合いが遠くになり

生きているのが自然になつて

あなたは若い熱をほとびらせ

それからの長い時間
長い時間

なにも言わない母だったという

蜜柑の筋を丁寧にとるばかりで
母は何も言わない
それから
やってこなくなつた

ぼくはなかまと
水を分け合い
肉を分け合い
こどもたちと遊んでいる

砲弾が飛んでいる

近所づきあい

口に差し込まれた匙をしばらく咬んで離さず
有田東二は八重樫ひろの顔をじつと見た

しつかりと目が開かれ
右手が動いて掌を見せた

力がすつと抜けた
ありがと

唇から言葉がこぼれ

匙を押し出した

目は閉ざされずひろを見続けた

さよなら

ひろも応えた

なんでも回収屋の清水が布団の下にあつたと

札を差し出した

八万ありました

ふんふんと集まった近所の五、六人がいった

どうしましろう

みんなはいつもの陽だまりのいつもの場所に座り込んだ

だれもものをいわない

目を開いたままなのかい

部屋にまだいるひろに昔銀行屋が声をかけた
閉じられないんです

寝小便が止まらなくなった有田を

郵便屋の娘が連れてきた

先生のところがよかろうと思って

うちだめベッドがないの

看護師

よろよろするが頭はまだまだという泌尿器科医が引き取った

二畳の部屋で暮らすうち寝小便が減った

ひろは世話をしすぎると医師は小言をいう

みんなへの遺産と思えばいい

あんたも費用がいるし

八百屋のくにかいう

いりません

回収屋清水はきつぱり

郵便屋の娘がうなづく

焼かれるんがいややな　ち　いうとったな

うちもいややな

うどんやのすみこがつぶやく

先生のこの庭に埋めてやろう
誰が言い出したかみんなはうなづいていた
診断書は先生 死亡届はぼくが出しときます
と 回収屋
おれもそうしてくれんかな
あのぼろ屋の床下がいい
昔銀行屋が歯切れよくいう

先生もそろそろやなからうか
と うどんや

まあね

だんだんやね

この縁でいこうかね

いくしかなか

みなさん

八百屋が締めくくった

脱国家唱

観無量寿経を知らない
海に入ろうとする太陽から

歩いてくるなにかを待つランボー
寺院の塔の時鐘が鳴る
パリの無法者の雄たけびが聞こえる

誰にも会わず

舟に乗ってアフリカ大陸にいった
いきるすべを知った

だが

白い肌と十字架は元のままだった

ランボーの子だという男女が数人

妹に金銭を求めたが
ランボーは死んでいた

朝日が上がった後の海を見るぼく

雨粒がみえる

緑が新しい
鳥たちの活気

殺す
食う
産む

殺し続ける
殺し続ける
食う
食う
産み続ける
産み続ける

尾形亀之助は
草と風の諏訪から戻る
死にきれなかつた
何にも言わない妻と向かい合つて
列車に乗つて歸つた

布団の中に
御用聞きとか綿やでございと
何人となく
やつてくる
国や党が
きみの命をくれ
といつていと教えてくれる
逃げたい

が自分で命を終わらせるのもなんとなく
ましてや妻の命

寄る辺なく目をうつすらと明ける
いつそう暗い部屋
腹に刺された銃剣を両手で掴んだまま
瞳孔を開いたアジア人

生き延びる

決めたが
見えない
聞こえもしない
探す
臓腑にあたるものを
食うことにつながるものを
戦や国から逃げる
生き延びる
食いつなぐ
捕囚になるか
仲間をみつけるぞ

子供が生まれるぞ

遠ざかれ

遠ざかれ
一人作業があるだろう
生き散らしたものの山にもぐり
棒状になつて
作業せよ
あらゆる人との扉を閉じ
遠ざかれ
一人作業に打ち込め
食事と睡眠と排泄と清潔と洗濯とを怠らず
世界地図を敷き詰めて
一箱の遺品もないだろう
目の玉や皮膚だけだ
そして
扉が開かれ
知り合いが近づいてくる
願わくばおれを食つてくれ